

2025年2月1日 【清真学園 校長室だより】 「教養」について考える

12月にお伝えした演劇部の、関東大会（横浜）の舞台を見届けてきました。演題は「脱げない」。ファストファッション産業の裏側に潜む、生産国の搾取される労働者たちの過酷な労働環境について問題提起をするという、きわめて重い、社会的な課題を取り扱っていました。そして、演劇部員一人ひとりの、主題に対する理解度の深さが伝わる、とてもレベルの高い公演でした。結果は見事に優秀賞。難かしいテーマに正面から取り組んだ、多くの観客の胸を打った演技の賜だと確信をしています。

さて、変化に富むこの時代の学校教育において、正解のない世界にチャレンジするための探究力を獲得することはもとより、社会人基礎力の育成も、以前からお伝えしているように大きな課題です。この二つの力に加えて、もう一つ、意識していることがあります。それが、「教養」です。教育機関である学校で教養を身につけるといって、若干違和感をもたれる向きもあろうかとは思いますが、教養そのものに対する理解やその必要性、向き合う上での心構えなどは、学校として責任をもって生徒達に伝えておく必要はあると考えています。

そのためのヒントを探して、最近、「教養」をキーワードにした書籍を3冊ほど読みましたので、少しご紹介します。

- ① 工学博士・田坂広志氏の「教養を磨く」
- ② イェール大学元助教授・斉藤淳氏の「アメリカの大学生が学んでいる本物の教養」
- ③ 大学院大学至善館教授・橋爪代三郎氏の「人間にとって教養とは何か」

【教養とは何か】について田坂氏は、多くの読書を通じて獲得した知識を通して、「人間としての生き方」を学び実践すること、としています。斉藤氏は、目的を定めずに積み重ねられるもの、教養を身につける目的は、教養を身につける道程そのものである、と言います。そして橋爪氏は端的に、「これまで人間が考えてきたことのすべて」。過去、誰かがある命題を考えた、その大事な結論が、今に伝わっている。それを知っていることが「教養」であると記しています。

教養について折に触れ、少しずつ生徒達に伝えていければと考えています。